

吉田川西遺跡

吉田長畝土地区画整理事業
発掘調査報告書



1986

塩尻市教育委員会

はじめに

吉田川西遺跡は、広丘吉田の国道19号線と田川とに挟まれた地域に存在する広大な遺跡であります。従来までの調査ではあまり成果がなく、ほとんどその存在が知られていなかった遺跡であります。しかし最近になって中央道長野線が本遺跡の真ん中を横切ることになり、それに伴い道路用地内で行われた発掘調査において平安時代の住居址250余軒の他、数々の貴重な出土品があり、県内はおろか全国的にも極めて貴重な遺跡として一躍有名になったことはすでに皆さんの周知の事と思います。そんな中で折りしもこの遺跡の一部地域において土地区画整理事業が行われることになり、工事に先立ち発掘調査を行い記録保存として残すことになりました。

発掘調査は市文化財調査委員長中島章二先生を団長に、調査員には長野県考古学会員の諸氏をお願いし、酷暑炎天の中、8月3日から8月12日まで7日間にわたり実施されました。この調査では遺構、遺物の存在をみることはできませんでしたが、かえってそのことにより遺跡の範囲が従来よりかなり縮小されることを確認することができました。

この発掘調査が無事完了するについては、吉田長畝土地区画整理準備委員会代表の赤津健郎氏をはじめとする多数の地元の方々と関係の皆さんの深い御理解と暖かい御援助によるものであり、ここに衷心より敬意と感謝をささげる次第であります。

昭和61年 2月

塩尻市教育委員会

例 言

- ・本書は、塩尻市大字広丘吉田地区における、吉田長畝土地区画整理事業に伴う吉田川西遺跡の発掘調査報告書である。
- ・本書の執筆、編集は鳥羽が行なった。
- ・本調査の諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

第I章 調査状況

第1節 発掘調査に至る経過

昭和59年11月、市都市計画課より市教委へ吉田長畝地区土地画整理事業の予定地区内に吉田川西遺跡がかかるとの連絡があった。さっそく市教委の小林、鳥羽は市都市計画課中野の案内のもとに現地に赴き、調査したところ、これまで遺跡の範囲内とされていた地域に工事がはいることを確認し、工事施工担当課である市都市計画課に工事に先立つ緊急発掘調査の必要を申し入れ、同課の申し入れにより市教委は調査の依頼を受けた。

昭和60年4月30日、吉田公民館に於いて地元関係役員、市都市計画課と市教委による調査時期および調査箇所についての協議が行われる。

6月11日、市都市計画課細田による現地説明があり、発掘箇所を決定する。

7月16日、調査範囲のクイ打ちが行われる。

8月2日、塩尻市は市教委に発掘調査を委託し、市教委は吉田川西遺跡発掘調査団（団長 中島章二氏）に調査を再委託する。

第2節 調査体制

団長	中島章二	（市文化財調査委員長）
担当者	鳥羽嘉彦	（長野県考古学会員、市教委）
調査員	小林康男	（日本考古学協会員、市教委）
	伊東直登	（長野県考古学会員、市教委）
調査補助員	龍堅 守、腰原典明、奥原俊幸、掬川由里子	
参加者	白木正富、古谷広樹、米山米三郎、中林重男、中林喜三江、中垣内秋人、手塚好任、山崎 武、岩本洋行、小野英幸、猿田寿聡、春日隆幸、赤津健郎、赤津秀和。	
事務局	小松優一	（市教育長）
	二木三郎	（市教委総合文化センター所長）
	清水良次	（ " 文化教養担当課長）
	原田 博	（ " 文化教養担当次長）
	小林康男	（ " 平出遺跡考古博物館学芸員）
	鳥羽嘉彦	（ " 文化教養担当主事）
	伊東直登	（ " 文化教養担当主事）

第3節 調査日誌

○昭和60年8月3日(土)
晴 発掘器材およびテントを現場へ搬入。テントを設営する。

○8月6日(火) 晴時々小雨 本日より発掘作業開始。調査対象の4枚の畑のうち南西の畑、および南東の畑に幅2mのトレンチを設定。Aトレンチ(2×30m)、Bトレンチ(2×50m)とする。トレンチ設定後、表土剥ぎおよび遺構検出作業。約20cm厚の耕土の下に良質のロームを確認したが、遺物は皆無。性格不明のピット群検出。

○8月7日(水) 晴時々小雨 台風の影響で昨日に引き続き天候不安定。残りの東の畑と北西の畑にもトレンチ設定。Cトレンチ(2×55m)、Dトレンチ(2×25m)、Eトレンチ(2×20m)とする。AトレンチおよびBトレンチのピット掘り下げ。15~20cm厚のロームの下位に礫層を確認。遺物出土せず。Cトレンチの表土剥ぎ。信毎記者来訪。

○8月8日(木) 晴 DトレンチとEトレンチの表土除去作業。AトレンチとBト



発掘調査風景



平面図測図

レンチのピットを半截し掘り下げる。セクション図化。県埋文センター、市都市計画課来訪。

○8月9日(金)晴 Aトレンチの平面図測図。全体写真撮影後、埋め戻す。Bトレンチのピット群および溝のセクション図化。完成後、平面図測図。Cトレンチ中央に住居址と思われる落ち込みがあっが、掘り下げたところ深さ40cmで砂層に達し、床面らしきものなし。茶碗片、徳利の口が出土。DトレンチとEトレンチの掘り下げ。

○8月10日(土)晴 Bトレンチ埋め戻し。Cトレンチのセクション図化。完掘後、平面図測図。全体写真撮影後、埋め戻し。DトレンチおよびEトレンチの掘り下げ。平面図測図。

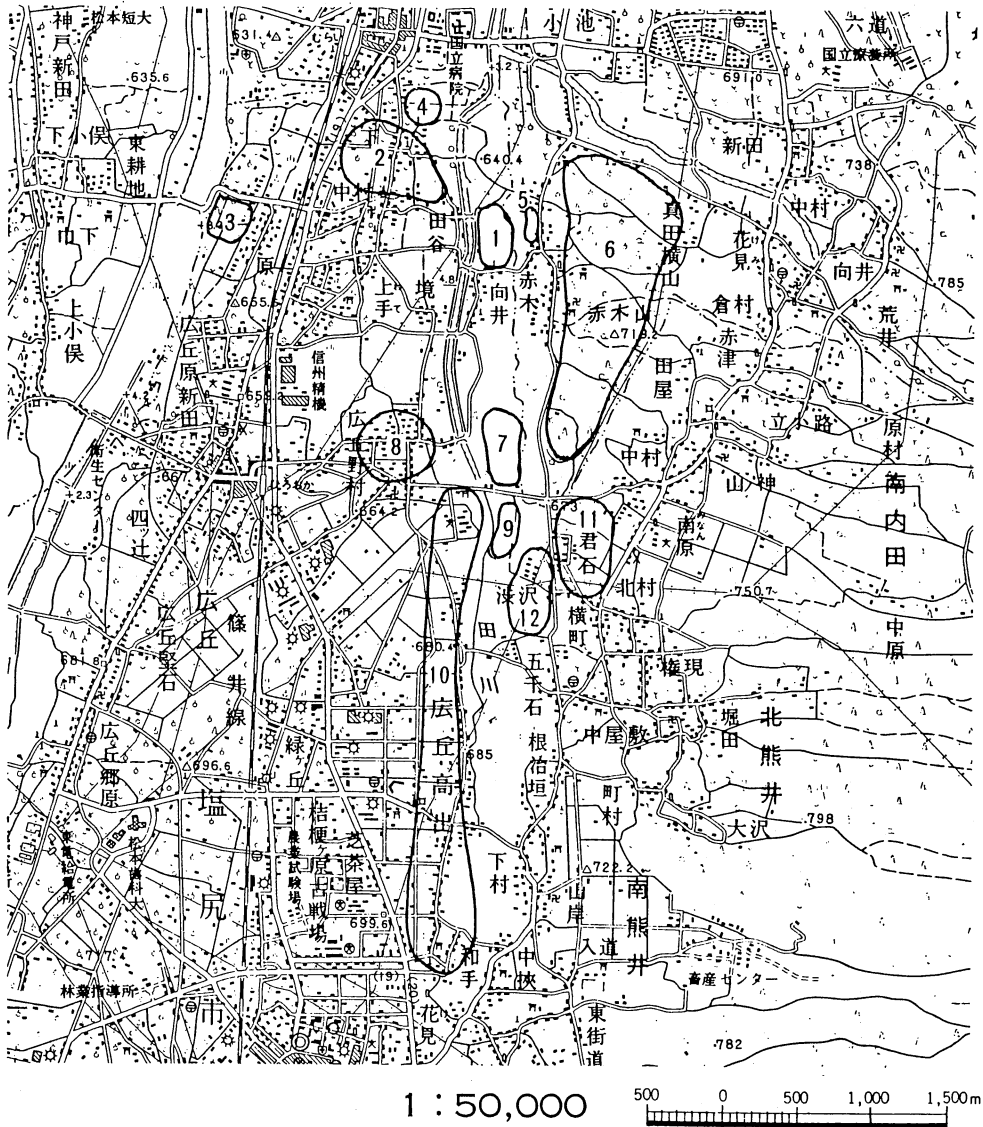
○8月11日(日)晴 定休日。

○8月12日(月)曇時々雨 Cトレンチ埋め戻し。。DトレンチおよびEトレンチの全体写真撮影。埋め戻し、テントを取り壊し、器材片付け。撤収作業。

第II章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置

吉田川西遺跡は塩尻市大字広丘吉田地籍にあり、国鉄村井駅から南東へ約1km隔てた地点にある。ここは塩尻市の最も北に位置し、遺跡の僅か500m北側は松本市との市境となっている。東



- 1 吉田向井 2 吉田川西 3 長者屋敷 4 若宮
- 5 小赤 6 赤城山遺跡群 7 花見 8 野村
- 9 高田 10 高出遺跡群 11 君石 12 渋沢

第1図 吉田川西遺跡周辺遺跡分布図

方約500mには東山山麓に源を發し、塩尻市の盆地東縁部を北流する田川の流れがあり、田川を隔てて県立田川高校の校舎を臨む。

この付近の地形の形成は田川と、木曾谷から流出する奈良井川の両河川によって搬入された砂礫層からなる沖積層を基盤とし、低位段丘面の郷原面上に乗る。田川の河岸段丘が最も顕著に發達するのは桔梗ヶ原台地に沿った河岸段丘域、即ちその北限を広丘野村の丘中学校東方の東西橋付近とみることができる。従って遺跡付近はすでに松本平の低平地に入った地域にあたり、河岸段丘という遺跡立地よりもむしろ自然堤防や氾濫原を形成する堆積環境の要素が強い場所といえよう。

遺跡は田川の左岸にかなり広範囲に展開しており、県埋蔵文化財センターにより昭和59年度から継続して行われている中央道長野線に係る同遺跡の発掘調査により大集落跡が確認されている。今回の調査地区は現在、畑地および宅地に利用されており、遺跡の西縁に位置する。

第2節 周辺遺跡

吉田川西遺跡の存在する田川流域は、遺跡の稠密地帯になっており、それらの中には赤木山遺跡群や高出遺跡群のように、かなり以前からその存在が知られた遺跡もあるが、ここ数年來たまたま緊急発掘調査が行われた遺跡も数多く、かなり細部にわたって内容を把握することができるようになった。

昭和56年、74,000余枚に及ぶ古銭出土で話題になった若宮遺跡は吉田川西遺跡の北隣りであり、また田川を挟んで川向うの吉田向井遺跡からは昭和57年の調査で竪穴住居址85軒に及ぶ平安時代の集落址を確認している。更に、この吉田向井遺跡と小田川を挟んで松本市域に対峙する小赤遺跡は、やはり昭和57年の調査で中世の遺物を主に得ている。

田川を逆上り広丘野村地籍に入ると、田川を挟んで縄文中期及び弥生後期の土器を出土した花見遺跡と縄文、平安時代の遺物を得ている野村遺跡があり、また昭和53年の発掘調査で平安時代に属する3軒の住居址を検出した高田遺跡がある。以上、ここまでが田川の低位段丘面、郷原面上に立地する遺跡であり、ここから以南は先述したように桔梗ヶ原台地に沿って河岸段丘が發達しており、遺跡の立地する面も一段高くなる。

段丘上には遺跡が密集しており、いわゆる高出遺跡群を構成している。高出遺跡群は広丘野村から高出地籍に展開する諸遺跡の総称であり、北から丘中学校（先土器、弥生～古墳の方形周溝墓1、平安時代住居址29）、黒崖（先土器、縄文早期、平安時代）、北原（先土器、縄文中期、弥生後期住居址4、平安住居址3、柱穴址2）、一夜窪（縄文早期）、上村（平安住居址3、柵列）を代表とする14の遺跡が存在する。

この他、田川右岸の小扇状地には縄文晩期、平安時代の君石遺跡、縄文中期、弥生後期の遺物の得られた渋沢遺跡がある。

参参考文献

大沼田三好他 1985「塩尻市広丘吉田若宮出土の備蓄銭」(平出遺跡考古博物館紀要第2集)

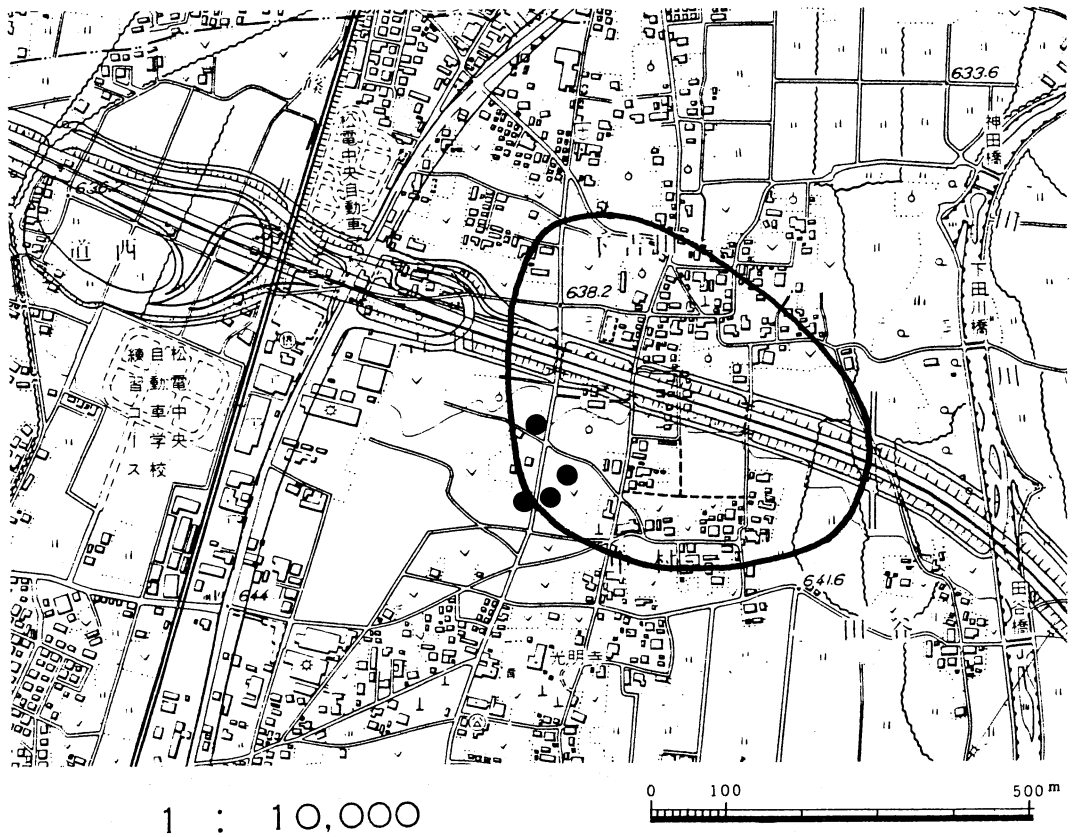
塩尻市教育委員会 1983「吉田向井」

松本市教育委員会 1983「松本市寿小赤遺跡」

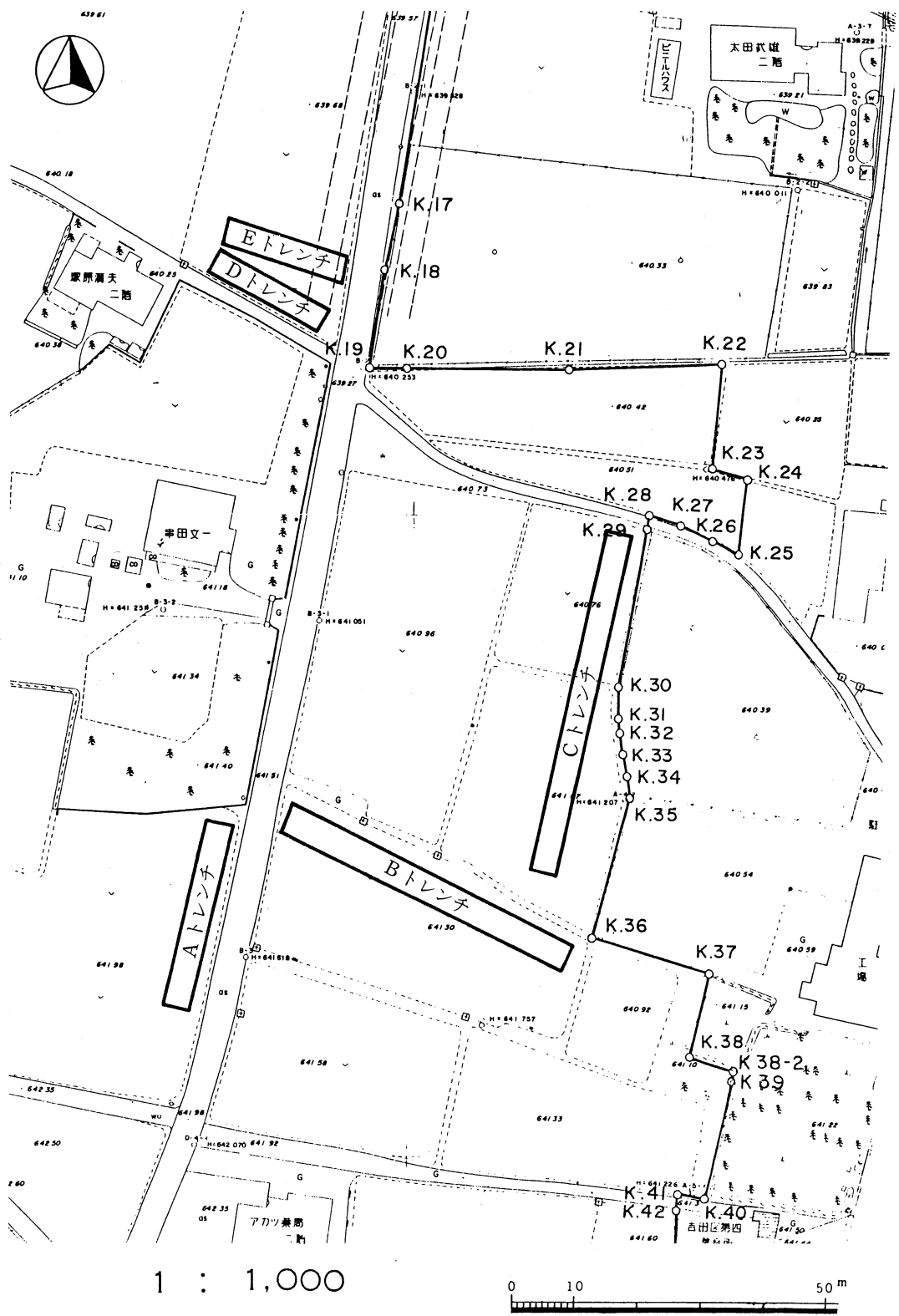
塩尻市教育委員会 1979「高田遺跡」

〃 1983「丘中学校遺跡」

〃 1986「君石遺跡」



第2図 吉田川西遺跡・範囲図および調査地点



第3図 吉田川西遺跡調査地区図

第Ⅲ章 調査経過

発掘区の設定

吉田川西遺跡は前述したように田川の左岸に東西に延びる遺跡であるが、今回の土地区画整理事業の対象となった地域はこの最も西縁をかすめており、遺跡の中心と考えられる場所から少なくとも200m以上離れている。従って調査にあたり遺構の存在は極めて薄いと先見し、遺跡の範囲を確認することに主眼を置いた。そこで調査地区の選定として面的な調査はあまり意味がないと考え、対象地区の数ヶ所に複数のトレンチを設定し遺構遺物の有無を伺った。

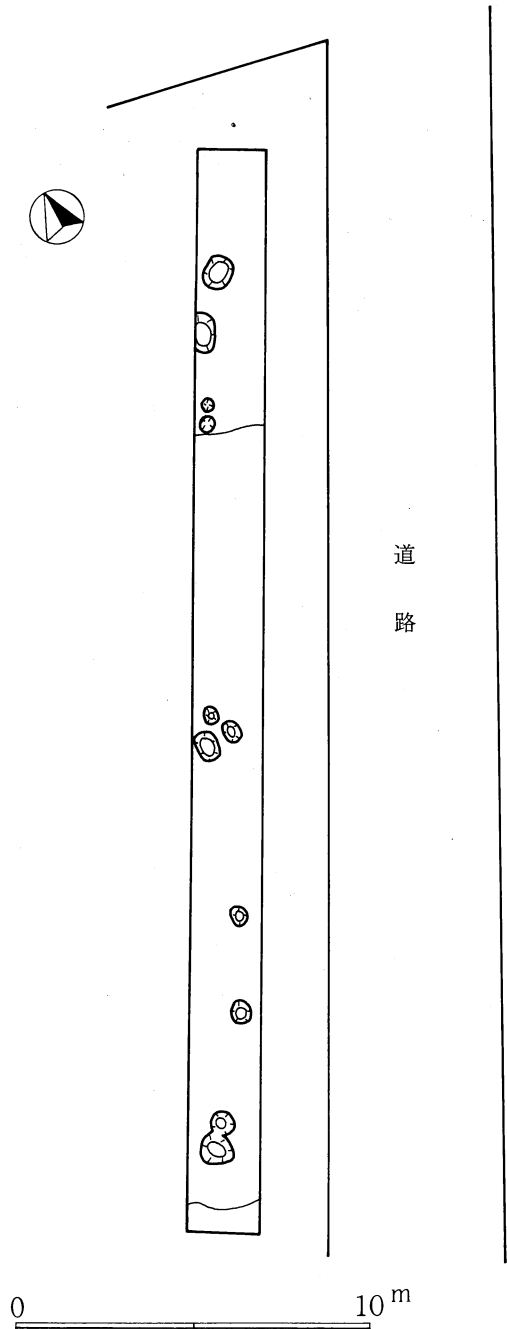
トレンチは道路に面した4枚の畑に設け、最も北側の畑にだけ2本、その他の畑には1本ずつ計5本（A～E）のトレンチを設定した。

Aトレンチ

調査地域の最も南側に位置し、道路沿いに南北に設定される。幅2m、長さ30mである。

表土の暗褐色土を約15cm掘り下げたところやや砂質のロームがあり、その下位に中粒砂の砂礫層が顔を覗かせる。径1～4cmの亜円礫を混入する黄灰色の層でよく締っている。上位層が下位へいくに従って砂質になるところからあまり深部にまで耕作による攪乱ははいていないと思われる。

検出面は緩く南へ傾斜し、礫混りのため凹凸は激しい。この面でトレンチ全域にあたって11基のピットが検出された。平面形は円形もしくは楕円形で、断面形はタライ形もしくは播鉢形を有する。これらの覆土はすべて暗褐色土であり砂礫層を底面としている。遺物は出土せず掘り込みも整然でないところから人為的な遺構とは考えられないものである。



第4図 A ト レ ン チ

Bトレンチ

道路から東側へ東西に延びるトレンチであり、幅2m、長さ50mである。遺跡の中心へ延びるトレンチのため発掘当初、最も成果が期待されたトレンチであった。

暗褐色土がやや厚く、20cm掘り下げたところ砂礫の少ないきれいなロームとなる。この面は非常に緩く東南方向へ傾斜している。

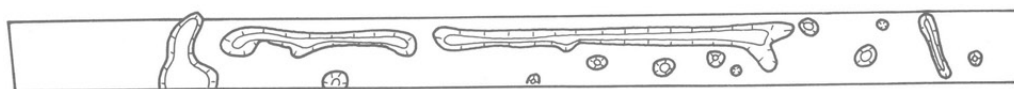
東端10mの間はロームを欠

除し、中粒の淘汰の良い川原砂となる。また西側もロームを約20cm下げるとこの川原砂が露出する。

ローム面には大小23基のピットおよび溝が検出された。ピットはAトレンチで検出されたものと同様、さまざまな形状のものがあったが、やはり出土遺物は皆無である。溝はトレンチの西側にトレンチに沿って走っており、途中1ヶ所途切れるが総延長16mを測り幅は平均50cmである。やはり耕作に伴うものと思われる。



Aトレンチ



0 10 m

第5図 B ト レ ン チ

Cトレンチ

Bトレンチ東端から北へ延びるトレンチで調査区の中では最も長い。

表土は他のトレンチに比べて最も厚く、北側へいくに従ってその傾向は顕著となった。またロームブロックの混入が多いところから、かなり耕作による攪乱がはいっているものとみられる。表土の下位には厚さ20cmの礫混りロームがあるが、やはり南端8mはローム層を欠除し、直接、砂層となる。この傾向はBトレンチでみられたものと一致する。

ローム面は南へ傾斜するが凹凸が激しい。この面でもやはりピット11基と性格不明の落ち込みがみられた。落ち込みはトレンチ中央部に位置し、径4mで東西両端が切られ、やや不整な楕円形を有する。壁および底はかなり起状に富み通常の遺構にみられる整然性はない。ピット、落ち込み共に出土遺物はなかった。



Bトレンチ



Cトレンチ

Dトレンチ

調査地域の最も北側の畑にあり東西方向に延びる。幅2m、長さ20mと最も短いトレンチである。

他のトレンチとやや離れているが表土の厚さはほぼ同じである。ローム粒を多く含むため茶褐色を呈し、粘性も弱い。下位のローム層は砂質の部分が少なく、よく締った比較的良好なロームである。

ここでもピットが検出されたが他と比べ極めて少なく4基のみであった。しかし掘り込みはすべて30~40cmと深く、断面形がタライ形のものである。

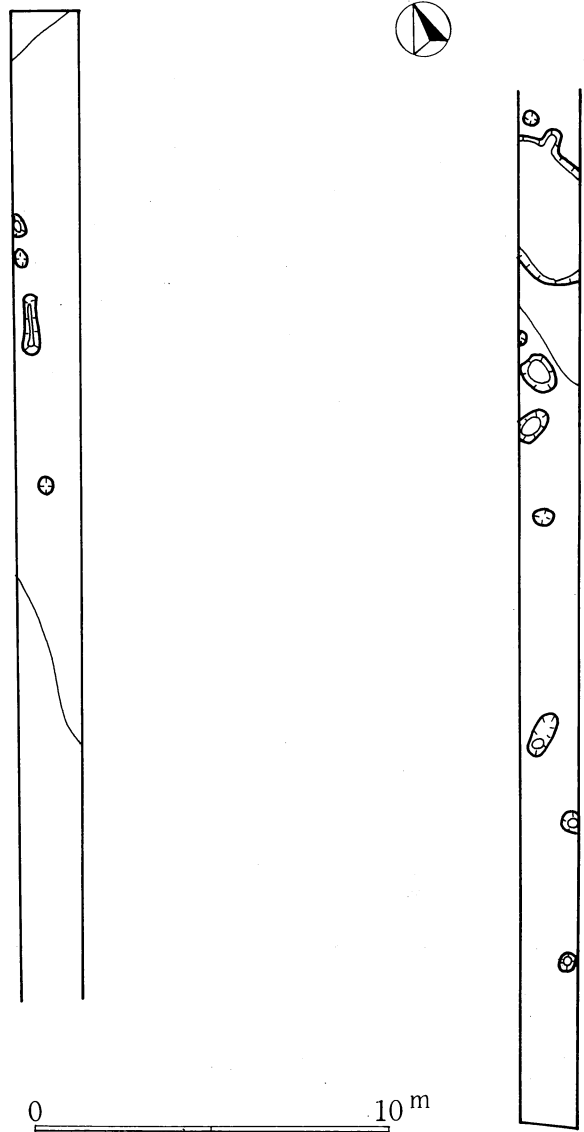
Eトレンチ

Dトレンチと同じ畑に設定され、2本は西側を頂点にしてV字に配置された。調査区の中では最も北側に位置する。やはり2×20mのトレンチである。

土層は層相、厚さは隣接するDトレンチとほぼ同じであり、やはり耕作による攪乱が著しいため表土にローム粒を多く混入し褐色性を強く呈する。約15cm掘り下げるとローム面に達する。ロームは砂粒の混合が少ない褐色ロームであるが、攪乱のためか上位層との漸移部分が多く、他の畑のものに比べて境界がやや不明瞭である。トレンチ方向に等深線が入るためローム面はほぼ水平を呈する。トレンチ全域にわたってピットが8基検出された。形態・規模共に他に類似するが、偶然か隣りのDトレンチのものに比べやや浅い。出土遺物はない。

発掘区を通してすべてのトレンチにピットが検出され、その総数は57基にも及ぶ。また他にもBトレンチ西側の溝やCトレンチ中央の性格不明の落ち込みなどが検出され、ローム層上面(ロームを欠除する部分では下位の砂層上面)にはかなりの落ち込みが検出されたことになる。

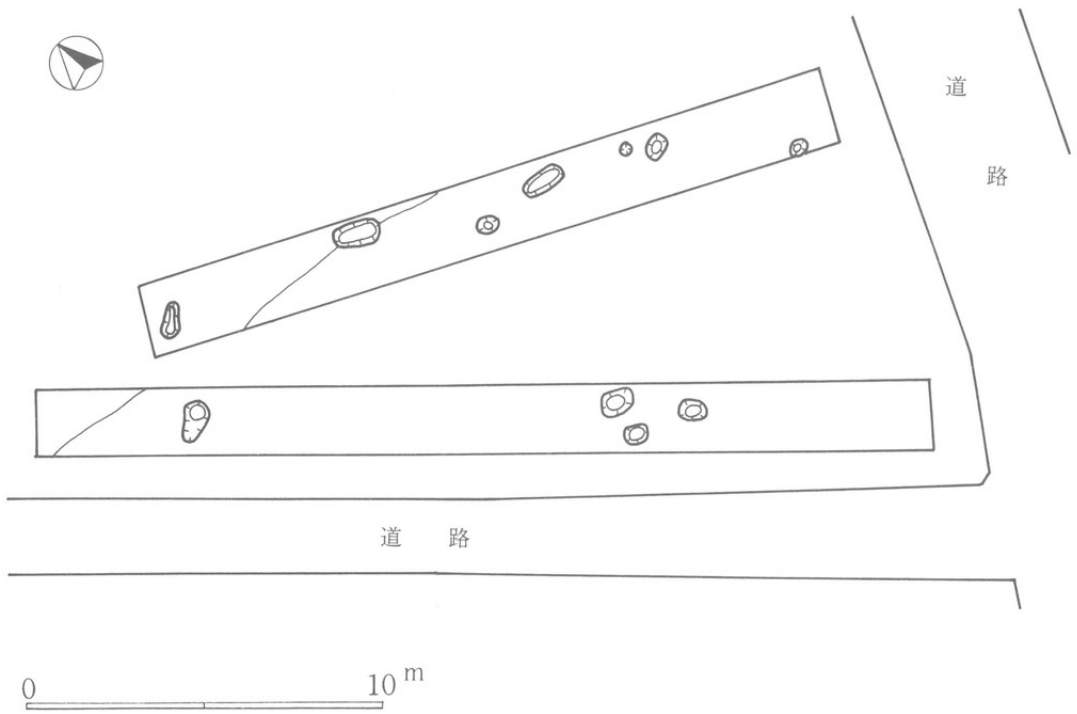
これらの中には調査中、何らかの遺構ではなかったかと考えられたものもあったが、共通して出土遺物はなく、また灰・焼土・集石といった人為的痕跡もみられないことから遺構であると断定するに至らなかった。これらの成因を明らかにすることはできないが耕作による表土の攪乱などを勘案すると、おそらくそのほとんどは耕作に伴うものや桑など立木の抜根跡であろうと思われる。



第6図 C ト レ ン チ



Dトレンチ



第7図 D・Eトレンチ

第Ⅳ章 ま と め

昭和57年夏、田川を挟んで本遺跡と対峙する吉田下向井地籍において、土地改良事業に伴う吉田向井遺跡緊急発掘調査が市教委によって行われた。約1ヶ月にわたる調査の結果、平安時代の住居址85軒、建物址3基が検出され、大集落跡が確認された。またそれと相前後して田川のわずかに上流にあたる野村地籍で丘中学校遺跡緊急発掘調査が行われ、大規模な集落の発見、寺の存在を暗示する墨書土器、円面硯など多大な成果を得ることができた。この広丘吉田から野村、高出一帯にかけて田川流域はこれまで古代筑摩六郷の1つ、良田郷の中心地域として多くの関係者から推察されてきたが、この低平地に考古学的調査が入る機会がないままにたいした成果もなく、その実態解明に程遠い状況であった。しかし最近のこれらの一連の調査により、この周辺一帯にかけてかなりの勢力があったことが確認され、貴重な資料を数多く提供することができた。

そんな中で吉田の田川左岸にあたる本遺跡付近は遺物が表面採集できる程度、すなわち単独の遺跡としては知られているが、周辺遺跡との関係を明らかにする位ならず、ほとんど空白地域同然となっていた。本来、河岸段丘上の微高地であるこちらの方が好立地条件といえるのである。折りしも、この地域に中央道長野線が通過することになり、昨年度から本遺跡の発掘調査が長野県埋蔵文化財センターによって行われることになった。その結果、当初の期待を上回る平安時代の住居址250余軒に及ぶ大集落跡を確認することができ、併せて大型住居、筆の穂先、緑釉陶器セットなど貴重な資料を数多く提供した。この調査は通過する中央道用地内に限られ、その成果は本遺跡の一部を表すにすぎないが、それとても松本平を代表する遺跡にふさわしいものであり、良田郷の中心地的な遺跡であったことを示唆するものとなった。

今回の土地区画整理事業は幸いにもこの広大な吉田川西遺跡の西縁部を僅かにかすめる程度にとどまった。ここはすぐ北側の中央道長野線用地内で昨年入れた試掘溝でもほとんど成果はなく、また調査に先立つ表面踏査においても遺物が皆無であったため、遺跡がここまで及んでいないとある程度の子測をし、それを実証するため調査に臨んだ。調査の結果、おそらく耕作に起因すると思われるピットが耕作土下に多数検出されたが、残念ながら遺構と断定されるものは全くなく、また出土遺物も皆無であった。調査地域南東隅の一部地域を除き表土下にロームの残存を確認することができたことから、ここは田川の氾濫をほとんど受けておらず、従ってそれによって遺構が消滅したものではないことを明らかにしている。やはり当初の子測通り遺跡はここまでは及んでおらず、より東側に存在していたものと想定される。

ともあれ、発掘調査は予算、期間が限られていたため酷暑炎天下での作業が連日続いたわけであるが、これに参加・御協力いただいた作業員の皆さんには心よりお礼を申し上げるとともに、深い御理解と御援助をいただいた地元の関係役員および地権者の方々には衷心より厚く感謝申し上げます次第です。

吉 田 川 西 遺 跡

—吉田長畝土地地区画整理事業発掘調査報告書—

昭和61年 3 月20日 印刷

昭和61年 3 月25日 発行

発行 塩 尻 市 教 育 委 員 会

印刷 (株) 高 砂 印 刷 所
